



くらしとごみ

第2回 使い捨てプラスチックの削減は世界の潮流！

金子 泰純

海洋プラスチックごみの削減に向けた取組が世界中で始まっています。日本から流れ出たプラスチックごみは、太平洋を東へ、ハワイ諸島や米国西海岸へと漂流していきます。一方で日本海や東シナ海に面した海岸には、ハンゲルや中国語が記されたペットボトル、漁具等が流れ着きます。今や国境を越えた地球規模の環境問題となっているのです。そこで、国連は持続可能な開発目標（SDGs）に「海の豊かさを守ろう」を掲げました。

陸上から海洋に流出したプラスチックごみの量は世界で年に8百万トン、流出量の多いのは中国やインドネシアだと推定されています。離島をはじめ特定の海岸に大量に漂着した海洋ごみは、自治体やボランティアが回収に努めています。流れ出す元を絶たねばイタチごっこなのは自明のこと。プラスチックの生産量は1964年から50年間で20倍以上に急増し2014年には3億1千万トンに達しましたが、今後20年間でさらに倍増すると推定されています。生産量の増大は海洋プラスチックごみの増大を招きかねません。プラスチックの流出防止策、リサイクルの徹底を図るのはもちろんですが、プラスチックの使用量を減らすことが肝要です。そのために、世界では使い捨てプラスチックの使用を制限する方向へと歩み出しています。環境問題に先進的なEUの取組を

みてみましょう。レジ袋の有料化等により2019年末には一人当たり年に90枚以内、2025年末には40枚以内に削減するとの目標を2015年に決めました。日本でもマイバッグ運動やレジ袋有料化に努めているとはいえ、いまだに年に300億枚、一人当たり200枚以上の使用量です。さらにEUは、今年5月にプラスチック製のストロー（以下プラスチック）やマドラー、風船の棒、綿棒、食卓食器類は禁止との厳しい提案をしました。代替品が既にあり無理なく買える価格で提供されているとの条件を満たす品が対象です。

プラスチックの代わりになるのは何でしょうか。まずは紙製のストローです。価格や耐久性、口当たり等でまだまだプラスチック製に及ばないとの指摘もありますが、多くの場合、紙製でも十分ではないでしょうか。そもそもストロー（straw）とは麦わらのこと。ベトナムでは空芯菜を、アメリカではパスタをストローに使っているとのニュースもありました。繰り返し使うステンレス製やアルミ製のストローも売られています。それを持参するとマイ・カップならぬマイ・ストローとなります。使い捨てのプラスチックの削減に取り組むことは、世界の潮流となりつつあるのです。

（かねこ・ひろずみ 和歌山大学システム工学部教授／COC+推進室長）

第107回 わだい浪切サロン

和歌山大学・岸和田市地域連携事業

こどもの視力と眼の健康（仮）

話題提供者 高橋 ひとみ氏 桃山学院大学 法学部（健康教育学）教授

日時

2018年11月21日 水 19:00～20:30

場所

岸和田市立浪切ホール 1階 多目的ホール

わだい浪切サロンとは？

毎月第3水曜日（2月と8月を除く）の夜7時、岸和田市立浪切ホールで開催するmini和歌山大学です。申込み不要、参加費無料。

お問合せ先：和歌山大学岸和田サテライト 〒596-0014 岸和田市港緑町1-1 浪切ホール2F

TEL & FAX：072-433-0875